

※ PDF 内のリンクをクリックすると
GoogleMaps の地図が開きます。

弘法大師空海が 虚空蔵求聞持法を成満した 室戸岬の行場を訪ねる

酒本幸祐

空海が虚空蔵求聞持法を成満した御蔵洞前の広場からの景色。
1200 年前の空海も同じ景色を見ていたのだろう。

虚空蔵菩薩こくぞうぼさつという仏様がいらっしゃる。数多い菩薩の中の一尊であり、明けの明星は虚空蔵菩薩の化身であるといわれている。虚空蔵とは虚空の母胎という意味の漢訳で、広大な宇宙のような無限の智慧と慈悲を持った菩薩という意味である。そのようなことから、智慧、知識、記憶といった面で信仰されている菩薩である。

胎蔵界曼荼羅における虚空蔵院の主尊であり、密教では重要な菩薩である。

虚空蔵菩薩の智慧を授かろうと、京都の法輪寺では 13 歳になった少年少女が参詣する十三詣りという行事があるという。

この虚空蔵菩薩を本尊としての修法に「虚空蔵求聞持法もんじほつ」がある。この修法は、一定の作法に則して、50 日間毎日 2 万回、虚空蔵菩薩しんごんの真言を唱えるか、百日間で毎日 1 万回の虚空蔵真言を唱えるかはあるが、100 万回の虚空蔵真言を唱えるという苦行の修法である。

この行を成満した行者は、あらゆる経典を記憶し理解して忘れることがない。また一度眼にしたもの聞いたものはすべて記憶し、忘れないといわれる。

弘法大師空海がまだ空海を名乗る前、室戸岬の洞窟で虚空蔵求聞持法を成満した時、明けの明星が洞

窟の中の空海の口の中に飛び込んで来たという話は有名である。また日蓮も13歳の時、仏道を志すにあたって虚空蔵菩薩に21日間の祈願を行ったという話も知られている。

私がこの虚空蔵求聞持法を知ったのは、30歳の頃、40年も昔のことだった。当時はこの修法のすごさに憧れて、関係する本などを読み、自分にもできるのだろうかと思いを凝らしていた。しかし俗世の中で、記憶の奥へと消えていってしまった。

その後、想像だにできなかった、現在の仏事やお墓といった雑誌を創刊することになり、33年余もこの世界にいる。途中、四国八十八ヶ所霊場や、西国、坂東、秩父といった日本百観音霊場をはじめ、多くの神社や寺を参拝してきた。

70歳を過ぎて、歩いて来た道を振り返ってみると、過去の時々の出来事に関係付けられているように思え、不思議な感慨を覚える。

何故、今また虚空蔵求聞持法が脳裏に浮かんで来たのか。もともと智恵も才覚もないのだが、歳を重ね、いかに進歩のないかを思い知らされたことで、若い頃にもった虚空蔵求聞持法への憧れが蘇ったのだろうか。勿論、この厳しい修法をやってみるなど毛頭考えてもいない。せめて虚空蔵求聞持法に縁の深い地を訪ね、その場の空気を吸い、ささやかにでも我が老いた脳を覚醒できればと思ったのだった。

それならば、空海が厳しい苦行である虚空蔵求聞持法を成満し、明けの明星が空海の口の中に飛び込んだという室戸岬の洞窟を訪ねようと思った。現在はこの洞窟に入ることができると教えてもらった。

室戸岬は、20年ほど前、四国八十八ヶ所霊場を巡った時に訪ねていて、霧の中のような記憶があった。

空海は虚空蔵求聞持法を成満した後、唐に渡り、唐の高僧・惠果和尚より密教のすべてを授けられ帰朝した。その後、再びこの地を訪ね、嵯峨天皇の勅願を受けて建立した寺が、24番札所となっている**ほつみさきし 最御崎寺**である。寺は空海が虚空蔵求聞持法を成満した洞窟につらなる室戸岬の切り立った山頂にある。20年ほど前には、最御崎寺の参拝はしたが、この洞窟は訪ねていなかった。

高知県は四国の南半分ほどもあるが、大半が山地



黒潮鉄道からの風景。広々とした景観が美しい。

で、室戸岬はその東端の辺境の地である。ゆえに公共交通を使つての移動には、充分な下調べが必要だった。宿は最御崎寺の宿坊を予約して、ほぼ出発準備は整った。

もう一つ出発前に憶えておくことがあった。それは虚空蔵菩薩の真言である。最御崎寺の本尊も虚空蔵菩薩であり、虚空蔵求聞持法にとっては一番重要な真言である。空海が虚空蔵求聞持法を成満したという洞窟内に座して、虚空蔵菩薩の真言を唱えてみたいと、切に思っていたからだ。

「ノウボウアキャシャキャラバヤ オンアリキャマリボリソワカ」真言とは、仏の梵名の音訳であり、意味がとれないので、ただ音を丸暗記するため、なかなか難しい。語呂のいい真言もあるが、虚空蔵菩薩の真言は特に難しかった。紙に大きく書いて、繰り返し記憶して、3日程でなんとかかすらすらと唱えることができた。

関東に大きな被害のあった台風の通過を待って、9月16日、室戸岬に向って午前8時10分に羽田を発った。

高知空港は二度目だが、発着便数は多いのだが、相変わらず不便なローカル空港だった。変わったことといえば、龍馬空港と愛称が付いたことで、到着ロビーに有名なポーズをした龍馬像があつたくらいだ。

空港は市街地からも離れていて、高知市内へはバス便があるが、室戸岬の方へは何もない。高知市内に行つて、高知駅から黒潮鉄道で室戸岬方面に向う方法もあつたが、タクシーで黒潮鉄道の途中駅の**野市駅**に向つた。車中、運転手は「過疎化で人口減少、だから車が運転できない人は大変です」と、ここでも地方の衰退を聞いた。

野市駅は線路は2階にあり、その下が駅舎となっている合理的な造りで、当然その他では地面の上に



黒潮鉄道の車輻側面にある展望デッキ。

線路が敷かれている。

野市駅を 10 時 50 分に出発した。黒潮鉄道の終点で、室戸岬へのほぼ中間地点である**奈半利駅**へは約 1 時間であった。

列車は 1 車輻編成のワンマンカーで、走行中右側には太平洋が広がり、どこまでも続く砂浜、青々とした松の防風林、駅毎に海に面した小さな集落と小さな漁港、景観のよさが黒潮鉄道の自慢のようだ。

古い車輻にはこの景観を楽しんでもらおうと、海側の車輻側面に、展望デッキがあった。珍しさからデッキに出て海を眺めた。デッキの幅は 1m ほどで、乗客は横一列に並ぶ形だった。鉄道マニアには知られているのか、隣りにいた 50 歳くらいの男性は「デッキからの景色を見たくて、わざわざこの列車に乗りに来ました」といった。

車内に戻り、同席となった老婦人は、室戸の方に住んでいるということで、奈半利から室戸へのバス事情を教えてくれた。この時間帯は約 1 時間に 1 本あると知り、急に室戸に近いものを感じた。

老婦人のご主人は外国航路の船員だったそうだが、3 年前に亡くなったという。二人の娘は高知市内と大阪に嫁ぎ、一人暮しだといった。今日は高知の娘を訪ねた帰りだともいった。室戸の辺りは、昔から船員になる男性が多いのだといった言葉が印象に残った。

よもやま話をしているうち、奈半利駅に着いた。この駅も、先の野市駅と同じ造りの駅舎だった。老婦人とはバスターミナルまで一緒だったが、1 便早いバスで帰って行った。

本日の予定は**室戸岬までバス**で行き、**最御崎寺**に着けばよかった。バスは約 1 時間で着くことも確認したので、あまり早く着いては宿坊も迷惑だろうと思ひ、1 時 30 分のバスに乗ることにした。

駅前広場にバスターミナルはあるが、乗り場は 1ヶ所だけで、そこに各方面行のバスが停車して乗り込むといったもので、都市部のターミナルとは大きく異なっている。

バス停には屋根付きの小さな広場があり、中央に大きな床几しょうぎが置かれていた。その奥に飲料や食品、野菜などを売る木造の売店があった。広い室内の中は、扱う商品が少ないため空虚な感じであった。

室戸にはもう着いた気持ちで、床几に座って煙草を吸いながら、駅前広場ののどかな風景を楽しんでいた。そんな時、大きな荷を背負って、歩き遍路の 50 歳前後の男性が来て、床几に荷を下ろし座り込んだ。ああそうか、この大きな床几は歩き遍路のためにあるのかと気がついた。奈半利は室戸方面から高知方面への歩き遍路の通過点なのだ。

遍路の男性は、疲れた表情で肩で息しながら、「徳島の 1 番札所からここまで歩いて来ましたが、今回はここで打切って佐賀へ帰ります」といった。休暇をとって歩き遍路に出たのだろう。「何日くらいかかりましたか」と問うと「随分とかかりました」と答えた。当人は予定していた休暇で、もう少し先まで行けると思っていたのだろう。少々残念な気持ちが表われていた。経験はないが、さほどに歩き遍路は大変なことなのだ。だから歩き遍路は大切にされ尊敬されるのだろう。

1 時間半ほど駅前広場でんびりして、1 時 32 分のバスで室戸を目指した。バスは室戸岬まで、岬を廻るように、国道 55 号をひた走った。この道もおおむね太平洋に沿って海岸横を走り、時々、大きな町があれば町中を走り、再び海岸沿いに戻るといった感じだった。

ひた走るといったのは、バス停は細く設けられているが、乗降客がほとんどなく、車内アナウンスは、バス停名を伝えるが、ほとんど通過であったのだ。交通量も少なく信号は希で、平均時速 60 キロくらいで快晴の中どんどん走った。

岬町の大きな町を過ぎ、室戸岬の最先端の室戸岬のバス停で降りた。ここから最御崎寺への遍路道があるはずだった。降車時に若い女性の運転手に遍路道の入口を尋ねると、左前方を指差した。礼をいっ



奈半利駅前の風景。南国らしい時が流れていた。

てバスを降りだが、これからが大変な苦行の始まりとなった。

運転手の仕草から、遍路道はすぐ近いと思っていた。ここから私の距離感と地元の人の距離感が大きく異なるという地獄に入ってしまった。

金剛杖をつき、空は明るく、風も気持ちよい、勇躍として歩き始めた。300 mほども歩いたが、山側にはそれらしい道がない。視力が悪いこともあって、見落としたのかと思いバス停まで戻ったが、やはりない。もっと先だったのかと、再び国道を先の所まで行き前進していくと、左の山に入る道があり、最御崎寺と書いた石柱があった。これだと確信して登っていくと、手入れの悪い芝生の広場があった。その奥に最御崎寺への距離を示す古い石柱があった。その先に木々が鬱蒼と繁った道らしいものがあり、入っていったが真暗で、道には大きな石が



室戸岬の先端に太平洋に向って建つ中岡慎太郎像。

転がっていて進むことができない。持参していた懐中電灯を当てると、なお歩くことの困難なことが分かっ

た。これは昔の遍路道なのだろうと理解したが、聞く人もなく、携帯電話で最御崎寺に聞いた。電話口の女性は親切に教えてくれるのだが、どうしても話がかみ合わない。教えることが無理と判断したのか、女性は「降りたバス停から少し戻ると車が登る大きな道がありますので、そちらから登って来て下さい」といった。

再び来た道を戻り始めた。ちょうど岬の先端に坂本龍馬の盟友の中岡慎太郎の大きな銅像が建っていた。その前に一軒の民家があって人がいたので遍路道を尋ねたが、よく分からない。ともかく寺の女性の言葉に従うことにして、戻り始めた。

この時は4時前で、歩き遍路の体験もできるし、お大師さまが修行しなさいと言っているんだと気持ち

にも余裕があった。降りたバス停を過ぎて「少し戻る」を信じて山側の大きな道を探して歩いた。5～600 mも戻ったのだが、大きい道はない。「少し」を信じて歩いていると、山側に小さな駐車場があり、そこに観光案内の大きな看板があった。現在地を見ると目指す最御崎寺は遠くなっている。間違えたと判断して、再々度戻った。山側の道を探して歩いていると再び中岡慎太郎像の前に戻ってしまった。途方に暮れて、また寺に電話した。先程の女性は「え、まだ下にいるのですか」と驚いた声を出した。「迎えに行つてあげたいけど一人しかいないので、ともかく大きな道がありますから」と、気の毒そうにいった。

陽も傾きかけてきていて、内心おだやか





最御崎寺の本堂。



最御崎寺の本堂手前に建つ大師堂。

でなくなってきた。また戻り、先に看板を見て引き返した前を通り 100 mほどの所に山に登る 2 車線の道路があった。これで寺に着けると安堵した。時計を見ると 5 時前だった。室戸岬の先端の中岡慎太郎像を中心に東に西にと 2 時間半も徘徊したことになる。

ところが最後の道は、[室戸スカイライン](#)といい歩道はあるものの車専用道路で、くねくねと急勾配で、海岸沿の国道から最御崎寺までは高低差 300 m ほどもあった。

息の上がる急な道であるが、登り切らなければ宿に着かない。必死な思いで登り始めた。登るほど暮れかかった太平洋が大きく見えてきたが、それを眺める余裕はなかった。二度の小休止をただけで、汗びっしょりになって寺の入口に辿り着いた。

境内は木に覆われていて薄暗く、本堂前で手を合せた時、やっと緊張がほぐれた。

結局、遍路道が見付からなかったの、帰ってから岬町観光協会に電話をすると、道は下車したバス停より 2 つ先のバス停の近くだといった。

宿坊は本堂の裏手にあり、設備のよいきれいな宿だった。電話口に出てくれた女性がフロントにいて、「大変でしたね」と労わってくれた。30 歳前半のやさしい人だった。予定では、翌日に空海が修法した洞窟でゆっくり過ごし、その日も宿坊に泊まることにしていた。しかし歩き疲れた最後の登り坂のことを思うと、再度あの坂を登る根性はなかった。そのことを伝えると、女性は笑いながら快くキャンセルに応じてくれた。

翌朝、足は大丈夫だったが寝過ぎて、8 時半に宿坊を出た。境内には 2 組ほどの遍路がいたが、静かに参拝ができた。本堂では般若心経 3 巻、覚えた

ばかりの虚空蔵菩薩の真言を 7 回唱えた。大師堂でも般若心経 3 巻、南無大師遍照金剛のご宝号を 7 回唱えた。本堂、大師堂とも唱えた経が堂内に吸い込まれている感覚で、気持ちのよい参拝ができたのはありがたかった。

寺を出て、昨日の室戸スカイラインを下り始めた。朝の光の中、太平洋が美しい景色をつくっている。下りは快適であるが、上から見下ろす曲がりくねった道を見て、よく 30 分ほどでこの道を登ってきたなど、自身驚いた。火事場のクソ力というのだろうか、一人で苦笑した。

国道に下りると、昨日、右往左往した所を歩いた。道はしっかり頭に入っていたし、洞窟の場所は、宿坊を出る前にしっかり教えてもらっていた。ともかく、室戸岬の道はこの国道一本だけなのだ。

バス停を 3 区間歩いた先の左手山側に、洞窟があった。9 時半頃に到着した。

大きくカーブした国道に接する形で、左側に大型バスが 3 台ほど駐車できそうな、砂利敷の駐車場を兼ねた広場があった。その奥の岩盤に 2 つの洞



海岸沿いの国道から急傾斜で登る室戸スカイライン。



室戸岬の先端部に、海に面した岩盤に空海が修行した御蔵洞がある。

窟が見えた。広場に入って左側に小さな木造の納経所があり、海側を除いて深い原生林に囲まれていた。

この洞窟は向って左が御厨人窟、右が神明窟といい、合せて御蔵洞と呼ばれている。洞窟は1ヶ所と想像していたので、納経所にいた老婦人に聞いてみると、左側は空海が修法中に住居として使っていたもので、右が虚空蔵求聞持法の修法の道場として使っていたのだと教えてくれた。

すでに数人の遍路がいたが、用意されているヘルメットをかぶり、洞窟に向った。2つの洞窟とも洞窟の入口には鉄製の落石防護ネットがあり、両方とも入口に鳥居が建っているのだが、よく見えない。洞窟のイメージを損なっているが、入ることができただけありがたかった。

修法中の住居として使っていた御厨人窟は直径5mほどの円形で、15mほどで、奥にコンクリートで造られた基壇があり、上に社が祀られていた。基壇には陶製の小さな灯明台が並んでいた。

中はかなり暗く、目が慣れてくると内部構造も分かった。基壇の左右が広がっていて、小さな落石が寄せられていた。これなら風が吹き込んでも雨に濡れることはないと思った。何が祀られているのか不明だったが礼拝して外に出た。

右側の神明窟に入った。この屈は御厨人窟に比べ奥行は浅く、10mほどだった。またこの窟は、入口から5mほどは天井部が高く、漏斗を横にした形を

していた。この窟の形を見て、空海が虚空蔵求聞持法を成満した時、明けの明星が空海の口に飛び込んだということを、すごく現実的に感じた。

洞窟の突き当たりにはコンクリートの基壇があり、そこにも小さな祠が祀られていた。祠の裏側に小さな窪みがあり、空海は海に向いここに座って修法したのだろうと想像した。

今回は洞窟を訪ねて、空海が唱えた虚空蔵菩薩の真言を唱えたくて、覚えてきたのだった。基壇の端に座り、外に向って真言を唱えようとしたが、パラパラと人が入ってくるので唱えることができず、一度出ることにした。

窟の中からの眺めは、入口に落石防護ネットがあるため、円形に外が見えるということにはなかった。空海が修法した時は、窟の前には空と海が広がっていて、そのことから、この修法の後に空海と名乗ったといわれている。

後で室戸市観光協会に聞くと、この洞窟は何万年か昔は、海中にあり、海蝕洞であったが、地震による室戸岬の隆起によって、海面に現れたものだった。現在も岬は地震のたびに隆起していて、1200年前に空海が修法した時は、今より海面に近かったのではと想像したりした。

空海が虚空蔵求聞持法を修法したのは二度目で、一度目は徳島県の山中、現在の21番札所となっている太龍寺のある太龍岳で修法している。しかしこ



空海が虚空蔵求聞持法の修法中、住居として使っていた御厨人窟。



虚空蔵求聞持法の修法の道場だった神明窟。



修法の道場だった神明窟から海を見た景色。



弘法大師のご朱印。

の時は悟ることができず、室戸岬の洞窟に来たという。そもそも虚空蔵求聞持法は、空海が山岳修行をしている時、旅の行者から教わったという。空海は虚空蔵求聞持法の力を得ると、二度の苦行を続けたことになる。空海をして二度の修法が必要だったことを思うと、いかにこの修法の難しいかが思われる。

再度、納経所を訪ね朱印をいただいた。納経所ができて以来 35 年間勤めているという老婦人は、見事な運筆で朱印を書き上げた。その見事さに「書きをやっていたのですか」と聞くと「何もやってません。すべてお大師様が教えてくれました」と笑顔で答えた。

その折に、御厨人窟と、神明窟には何を祀っているのかを聞いた。左側の御厨人窟には五所神社、右の修法をした神明窟には天照大神が祀られているといった。修法した窟には虚空蔵菩薩かと思っていただけに意外だった。その理由を尋ねると「お大師様が修法している時、窟の中に毒蛇が現れて修法の邪魔をするので、天照大神にお願いして毒蛇を退散してもらったから」と答えた。

地盤は隆起しているということなので、前の国道の海側に立った。急に岩場に打ち寄せる波音が大きくなり、手前の岩場に茂る草叢はあるものの、水平

線を境にして、まさに空海が見たであろう、空と海の風景があった。

昼過ぎになると遍路や、ここを訪ねてくる車も途切れてきた。この機と再び神明窟に入った。誰もいない中で、海に向かって基壇の端に座り、虚空蔵菩薩の真言を 7 回続けて唱えて、それを 3 度繰返した。思っていたことができたのは嬉しいことだった。唱え終るとパラパラと人が入ってきたので、天照大神に一礼して窟を出た。

できる限り、この地にいたい気持ちが強く、今夜の宿の高知市までの帰路を考えながら、納経所前のベンチで煙草を吸ったり、御蔵洞を眺めたり、時の過ぎていくままに過ごした。実に心おだやかな時間だった。

空海が虚空蔵求聞持法の修法を歌ったものがある。

法性の 室戸といえど 我が住めば
有為の浪風 よせぬ日ぞなし

午後 2 時、両の洞窟に一礼して、往路と同じコースで高知市へと向かった。

空と海、木々の緑と、潮風に、仏を思い自在に心が遊んだ旅だった。